

千葉県地方自治研究センター 副理事長
 全国市町村職員共済組合連合会 参与

佐藤 晴邦



千鳥ヶ淵は皇居の北西側のお堀を指す名称だそうです。昨年9月から、九段下から桜の名所の千鳥ヶ淵の脇を歩いて行くのが、朝の日課となりつつあります。東京には坂が多く、通勤途中にある袖摺坂の交差点には、瀧廉太郎の居住地跡の看板があり、歴史を感じさせてくれます。お屋敷が点在し、和と洋、新と古が混在する街並みを通り抜けた先に新しい職場があります。そこで、兎角、政治の動向に翻弄されがちな公的年金や医療保険制度に関係する仕事に携わっています。

年金に関しては、昨年の夏、8年ぶりに大きな法律改正がようやく実現しました。厚生年金と公務員の共済年金を統合する「被用者年金一元化法案」をはじめとする3法案が成立しました。被用者年金一元化については、2007年4月に法案が閣議決定されましたが、国会審議の混乱もあってその2年後に審議未了・廃案となりました。今回、成立した法案はこの前回廃案となったものがベースとなっています。

年金を議論する際に、安定性と公平性という二つの大きな観点があります。一昔前は、安定性に議論の重点がおかれていましたが、今世紀に入ってから公平性という点が強調されることが多くなっています。公平性といっても様々な側面がありますが、昨年の改正では、「官民格差の解消」に焦点があたり、公務員の職域年金の廃止（別に年金払い退職給付制度が新設された）や制度的差異の解消等が行われました。これにより「官民格差の解消」という観点からの年金分野の改革は、一区切りついた状況だと思えます。

公平性という点から最近よく言われるのが、社会保障制度の給付と負担の世代間格差です。若い世代ほど、生涯を通じて受け取る給付額より支払う負担額の方が大きくなるというものです。この

問題の厄介なところは、「世代間の公平とは何か」という問いに対して、衆目が一致する解答が見つかっていないことです。世代間の公平性には、様々な問題が絡んでおり、一朝一夕には答えは出てきません。また、高齢者にも、若者にもそれぞれの言い分や立場があり、世代間対立を煽っても問題は解決しません。

社会保障分野の世代間格差という場合、財源的にウェイトが大きいのが年金です。年金の世代間格差を解消する方法として、現行の賦課方式から積立方式への切り替えが一部で論じられています。賦課方式は、現在働く現役の人が払い込んだ保険料を現在の高齢者に支給する仕組みであり、この賦課方式によって「世代間扶養」が実現できる、とされています。

積立方式は、若い現役時代に払い込んだ保険料を積み立て、老後にそのお金を受け取る仕組みです。しかし、積立方式への制度切り替え時の二重の負担の問題や長期間にわたる年金積立金の運用に対するリスク等を考慮すると、年金制度の安定性という点から、年金研究者の間では、積立方式を支持するのは主流とはいえません。

2004年改正で、保険料率を毎年0.354%ずつ引き上げ、2018年に上限18.3%で固定することが決まっています。将来の保険料収入が決まっていますから、若い世代に比べて高年齢世代の相対的に高い年金給付を減らすことができれば、その分を若い世代の給付に上乗せできるということになります。大切なことは、世代間の年金給付のバランスをどう取るかということであり、このバランスが崩れれば制度に対する不信につながります。

正面からの取り組みが避けられがちな課題ですが、安定した年金制度の確立に向けて議論の深まりを期待します。